

平成25年 2月 定例会

◆(淵上陽一君)では、3番目の質問、**教職員の負担軽減**についてお尋ねいたします。

いじめ、不登校を初め、学校におけるさまざまな課題が議論されるたびに浮かび上がるのが、忙し過ぎる先生の問題であります。余りの忙しさのため、定年前に退職する先生や鬱病などの精神疾患を患う先生が増加したことから、文部科学省は、学校現場の負担軽減、教師の時間外業務の削減の取り組みを始めました。

本県でも、熊本県教育庁学校現場の負担軽減プロジェクトチームを立ち上げ、事務負担の軽減を重点とし、学校現場の負担を軽減するための具体的方針を検討し、取り組んでおられると承知しております。

一方、昨年3月公表された公立小中学校教職員の負担軽減に関するアンケート調査報告書を読みますと、幾つか気になる回答結果が出ております。

1点目は、日常業務で負担を感じるかとの問いに、いつも感じている、時々感じているの合計が、小中学校ともに90%に達していることであります。

2点目は、現在児童生徒と向き合う時間が不足していると感じているかとの質問に対し、小学校では70%、中学校でも64%が感じている、少しは感じていると回答した一方で、向き合う時間をふやすために、みずから何かに取り組んでいるかとの回答は、小学校で58%、中学校でも55%と半数にすぎません。

3点目は、昨年までと比較して、平日の時間外業務は削減されたかという問いに対する回答が、少し削減されたが小中とも11%だったのに対し、逆に、増加した、少し増加したは、小学校で22%、中学校では25%に上がり、余り変わらないが、双方とも半数を超えているところであります。

そして4点目は、学校で勤務時間縮減のための取り組みが行われているかとの質問に対し、小学校では、行っているが43%、行っていないが21%、わからないが34%、中学校では、わからないが最も多く38%、行っているが37%、行っていないが23%と回答されているのであります。

この結果からは、先生方の負担軽減が、上からのかけ声とは裏腹に、実際は遅々として進んでいないのが現状ではなかろうかと感じざるを得ません。もちろん、新しい指導要領により授業時間数が増加したり、また、教科指導外の生徒指導、いじめ、不登校、問題行動等に関する対応が、これまで以上に必要となってきたことは理解できます。

しかし私は、こうした状況にあっても、先生方が子供たちと向き合う時間を最大限に確保することは、あらゆる問題の未然防止のための1丁目1番地であると信じております。また、保護者からしても、これこそが学校や先生方に最も望んでいるところであろうと思います。

教職員の負担軽減は、学校長のリーダーシップのもとで取り組むこととされていますが、それぞれの学校長によって資質や指導力に差があるのは当然でありまして、それが、ひいては各学校での取り組み方の差になり、負担軽減の成果に違いとして出てくるのではないかと危惧する

ところです。

山鹿市のある中学校では、先生が生徒に向き合う時間をふやすために、さまざまな負担軽減を断行した結果、不登校やいじめを大幅に減らすことにつながったという事例を直接伺っております。

私は、教育委員会が、学校現場の負担軽減への取り組みの実例をきちんと把握し、しっかりと評価、検証を行った上で、成功事例を県内全校に紹介されてはいかがかと考えていますが、こうした取り組みを広げようというお考えがとおりか、お尋ねしたいと思います。また、負担軽減については、何と申しまして学校長の理解と実行力が求められますので、この面での学校長の資質向上にどのように取り組まれるのか、あわせて教育長にお尋ねいたします。

〔教育長田崎龍一君登壇〕

◎教育長(田崎龍一君) 教職員の負担感軽減については、重要課題の一つとして捉え、市町村教育委員会や学校現場と連携しながら、全庁挙げて取り組んでおります。

御紹介のありました山鹿市の中学校の取り組みは、鹿本教育事務所と山鹿市教育委員会が連携して進める山鹿市教育創造「夢プロジェクト」のもとで取り組まれた事例であります。校長のリーダーシップにより、思い切った学校改革に取り組み、授業改善や教職員の負担軽減に結びついたものです。このような成功事例を紹介することは大変有効と考えており、今後、教職員向け広報誌のほか、県教育委員会のホームページやメールシステム等を活用して、積極的に普及に努めてまいります。

次に、学校長の資質向上についてですが、学校現場において負担感軽減を着実に進めるためには、管理職が果たす役割が何よりも重要と考えております。そのため、これまで、民間企業経営者による講話の実施など、管理職の意識改革に取り組んでまいりました。今後は、大量退職期の到来も見据え、管理職のリーダーシップやマネジメント能力を高めるための研修を充実強化することとしております。学校改革や人材育成に積極的に取り組み、実績を上げている教育関係者から具体的事例や取り組み姿勢などを学ぶほか、みずからの学校の課題を見つけ、具体的解決策を立案、協議するワークショップ型の演習を取り入れるなど、より実践的な研修を充実させることで、管理職のさらなる資質向上を図ってまいります。

教職員一人一人のゆとりを生み出し、子供たちと向き合う時間を確保するために、引き続き、市町村教育委員会や学校現場、そして保護者や地域とも連携しながら、取り組みを進めてまいります。

〔淵上陽一君登壇〕

◆(淵上陽一君) ありがとうございます。

先日、教育委員長が、氷室先生の御質問に対する答弁の中で「教師は、学校生活のさまざまな場面で子供たちの様子を観察し、その表情や態度の小さな変化から、子供たちが抱えるいろいろな悩みに気づき、対処していくことが求められます。」と答弁をされました。私も、まさしくそのとおりであると思っております。

そのためには、まず、子供と向き合う時間をふやすことが必要であります。

教育長の答弁の中で、山鹿市の中学校の負担軽減に係る成功事例を紹介することは大変有効であると考えており、今後とも積極的に普及に努めていくという答弁をいただきましたので、どうかよろしく普及いただきますようお願いをいたします。